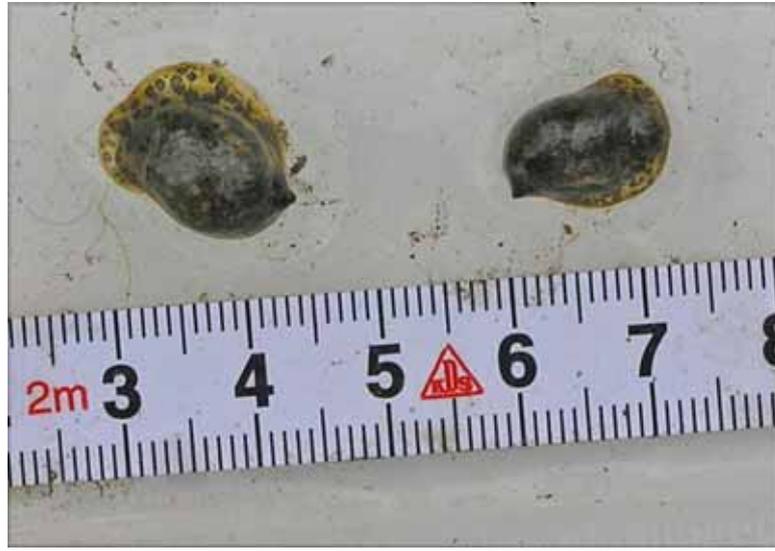


# モノアラガイ

*Radix auricularia japonica*



種名

分類

有肺目モノアラガイ科

俗称

ヒスイゴ(鹿児島)、カタツムリ(北海道)

形態的な特徴

殻は卵円形、薄質、半透明で右巻き。体色は黄土色に黒紋があり、触角は三角形で幅広い。殻高 25mm、殻径 20mm で蓋はなく、ヒメモノアラガイ、サカマキガイに似るが、ヒメモノアラガイの方が小さくサカマキガイは左巻きなので区別がつく。

分布

北海道、本州、四国、九州の各地に分布する。

繁殖行動

産卵は6月頃から始まり、雌雄同体で他個体と交尾をする。一度の産卵に1~20個の卵を細長い寒天質の袋に入れ、水草や石の表面、枯れ枝などに産みつける。二ヶ月ほどで成熟し繁殖する。また、ヘイケボタルの餌になることで知られている。

生息場所

小川や川の淀み、水田池沼にすむ。溜め池、沼などの岸近くにある石や木杭、水草、落ち葉の上などを這っている。高水温は好まず、都市部の生活排水などに汚染された川には生息できない。

食性

エサはおもに落ち葉や枯れ枝で、藻類の他動物の死骸や産みつけた卵塊を食べることもある。

生息環境への配慮事項

本来、本種が生息していた環境が水質悪化などにより本種の生息できない環境となった。現在、各地で激減しており、よく見られるのはヒメモノアラガイか、外来種のハブタエモノアラガイである。本種は浅くて流れが緩やかな淀みと、水生植物が一体となった環境を好む。これらの水域を開発などにより改変または埋立してしまったことにも減少の原因はあるが、外来種のサカマキガイが移入したことも原因の一つであるといえる。そのため、本種の保全には流れの緩やかな水域に水生植物が生えていること、サカマキガイが移入しないことなどが必要である。

その他

準絶滅危惧(新潟県RDB) 準絶滅危惧(環境省RDB)

引用文献：[http://www.maff.go.jp/nouson/mizu\\_midori/menu/main.html](http://www.maff.go.jp/nouson/mizu_midori/menu/main.html) を改変